

「星」と「錨」

私の知りあいには、Eという元海軍軍医中尉の医者がある。彼は私の経験と少し違うが、似たような話をした。彼の海軍時代にUという姓の水兵がいて、同年兵が何か悪いことをして、上官の兵曹から「誰がしたか」と叱られると、Uが真っ先に「私がしました」と申し出て、鉄拳制裁を受けるのだそうである。

始めは上官の兵曹も知らないで、殴っていたが、三度も四度もUが申し出てくると、これはおかしい、Uがしたものではないと思い、五度目ぐらいからはUが「私がしました」と言っても、「もう、分かった」と兵曹は言うだけで殴らなかつたという、しまいには本当にUが悪いことをして、そして「私がしました」と申し出てでも取り上げなかつたそうだ。これは人間の心理

の裏をついた巧妙なやり口であつた、と何度も笑いながら話していた。

予定者（陸軍軍医候補生採用予定者の略）の時、非常召集が時々あつた。最初は戸惑つたが、二回目くらいからは、班長のH伍長がそれとなく教えてくれて助かつたが、考えて見ると、教えて貰つては訓練にならない。日本の戦争に負けた原因は色々あるが、こういうなあなあがいけなかつたと書いている本もある。

ある区隊長が初めて大学や医専卒業の教育をするので、どういう風に教えたらいかがか分らないので、区隊長を教えてくれた学校の女の先生に教育のコツを聞きに行つたそうだ。その女の先生は「教育は五つ教えて三つ賞め、二つ叱つて、導きとなせ」と言つたという。私は今もこの言葉を思い出す。

私は身体のどこにも異常はないのであるが、血沈値だけが四十くらいあつたので保育隊であるS区隊に入れられた。見れば体の弱そうな者ばかりである。保育隊ということで使役には出なくてよかつたが、毎日の入浴が義務づけられていて、これは正直言つて迷惑した。他の区隊の者が勉強している時に、私の区隊だけ軍医学校の入浴場まで五〇〇メートルくらい歩いて行かなければならず、大分成績に影響を及ぼした。

私達のS区隊に保育隊に入らなくてもよいような者が何人もいた。人数の関係上、保育隊に回されたのであろう。この人達は体力で私達を圧倒していた。私達の日常生活は、彼らによって支配されていたようなところもあった。

復員後、何かの本を読んでいたら、猿の檻にはボス猿がいなければ、いけないのだそうである。人間が投げ与えた餌えさを拾った猿が、ボス猿に追いかけて、逃げ回るのを、動物園などに行くときよく見かけるが、あのようにボス猿が追い掛けないと、他の猿は運動不足になつて弱つて死ぬのだと書いてあった。その伝で行くと、区隊にふさわしくない元氣な者は、ボス猿の役目を知らず知らずの間に果たしていたということになる。人間の社会というのは巧く出来てゐる。

八月の中旬頃、神奈川県座間郡の相模原にある臨時東京第三陸軍病院（臨東三と略称した）に第二中隊保育隊が移動して来た。畳を敷いた大部屋に入れられた。臨東三では臨時に私達を受け入れたためか、食事が余りよくなく、いつも腹を空かせていた。臨東三は戦傷患者の療養施設で義手や義足を付けた兵隊が多かった。この人たちが食事時に食堂に行く時には、義手や義足がギッチョン、ギッチョンとなつた。私達の中には「ギッチョンチョン、ギッチョンチョン」そぞろに食事思ひだすかな」というざれ歌を作ったのがいた。とにかく腹が空いていた。食

事の時、食堂に二列縦隊で並んで行くのであるが、私達より先に食堂に着いた、何百人かが食べている「うどん」をずうずう啜る音が食堂の二十メートルくらい手前から聞こえてくると、今日は「うどん」か、あとからまた腹が減るなあと考え、歩く足取りにも元気がなくなるのであった。

臨東三では起床後よく駆け足をした。相模原の駅まで走り、それから北の方に回って走ると葡萄の強い香りがしたのを私は思いだす。

近くの座間に陸軍士官学校があり、一日見学に行ったことがあった。学校は何故か閑散としていて、二クラスくらいが授業を受けていた。誰かが「居眠りをしている生徒がいたぞ」と言った。私は士官学校の生徒も、私達と同じように居眠りをするんだなあと改めて感じ入った。

雄健神社にお参りをしたが、ここも閑散としていた。大砲を見せて貰った。砲身の先端に水平に直角に付いている直径二〇センチメートル、長さ四〇センチメートルくらいの筒は何かと説明役の将校に聞かれ、皆黙っていたら、「幼年学校の生徒は知っていたぞ、消音器だ」と言つて、少し笑われた。私もそんな物ではないかと考えていたが、もし、間違っていたら恥をかくので言わなかった。

長さ二〇メートル、直径五〇センチメートルくらいある大砲の砲身も見せてくれた。この大砲は日本には余り沢山ないような話であった。

戦術の講義は、陸軍大学のM大佐という教官から受けた。戦後、アメリカ軍の攻撃法やソ連の攻撃法を読んだが、それから見ると子供だましのような幼稚なものであった。M大佐は「眠たい者は寝てよし。その代わり目が覚めたらしつかり講義を聞け」と言った。私は遠慮なく眠った。十五分くらい眠ると目が覚めた。そして講義を聞いた。居眠りに対して、こんな理解のある教官は、このM大佐だけであつたので記憶に残っているのである。

授業は三区隊が一緒になって大きな講堂で受けた。ある区隊長の講義の時、どんな風の吹き回しか、急に「山下（奉文）大將閣下は今どこにおられるか知っているか」と私達に聞いた。一人の予定者が手を挙げて、「牡丹江におられます」と言った。「お前は どうして知っているんだ」と区隊長が尋ねたら、「私の伯父です」とその予定者は答えた。区隊長は「そうか」と言つて黙ってしまった。私は田舎の山家育ちであるが、エリートがいるもんだと思った。

中隊長のK少佐から何でもよいから質問があつたら書け、といつて紙を各人に一枚渡された。こういう時は、無難なことを書くのに限るので、私は「アメリカの陸軍の衛生制度は如何なりや」と書いた。こんな質問に答えるのは、私の最も得意とするところである。医大の大学試験の時の口頭試問で、「趣味は何ですか」と聞かれ、「詩」ですと答え、「誰の詩が好きですか」と聞かれ、「土井晩翠です」と返事して、試験官を苦笑させた故事がある。

この時の私の質問に対しては、何の返事も聞けなかつた。その代わり「帝国の連合艦隊いず

ここにありや」と書いた者がいる。「私も知らないのに返事ができるか」と言つてK少佐に一同叱られた。私がS区隊の内務班に帰り、同僚のR君に「馬鹿なことを書く奴がいるなあ」と同意を求めたら、「あれを書いたのは俺だ」との返事で、うっかり人に口は出すものではないと思つた。

他の区隊長の話ではこんな質問もあつたそうだ。「両側に崖が切り立っている狭い道を行軍している時に敵と遭遇し激戦となり、日本軍が負けて自決しなければならなくなつた場合、長い軍刀では道につかえると思うので、短い軍刀の方が良いと考えますが、私はどうしたらよいのでしょうか」と。私は、これは区隊長をからかつて、わざとした質問ではないかと、時々思ひだすことがある。

ある日、私が区隊長室に行くと、続いてR予定者が入つて来て、「区隊長殿、Rは間違つて済みませんでした」と謝っているのである。何かと思つて聞き耳を立ててみると、小学校の一年生以来ずつと書いてきた戸籍の番地が、軍医候補生任官のため、新しく戸籍謄本を取り寄せ、よく見てみると違つていたというのである。区隊長は「以後、注意するようにしろ」とだけ言つた。私は何と迂闊うかつな者もいることよと思つた。

ところが、人を笑えないのである。区隊長は「将校は天皇陛下が任命されるので姓名など戸

籍謄本を一劃でも違つてはいけない」とやかましくいうのである。私は余りうるさくいうので、念のために戸籍謄本を見てみた。驚くことに、私もひどい間違いをしでかしていたのである。松山の松が木偏にハを書き、その下にムを書くのではなくて、上にイを書いて、その下に口を書くのである。全く「もう」である。早速、区隊長に「松山は間違っていました」と誤りに行つた。私は馬齢六十八歳になったが、なお、飽きもせず過ちを続け、その度にしまったと反省し、また、別の過ちを性懲りもなく繰り返している。私にとって「人生とは誤の連続なり」という言葉が一番ふさわしいような気がする。

教育終了直前に、臨東三と陸軍士官学校の間にある相武台で、総仕上げの意味での発火演習が行われた。私達S区隊は身体が弱いためか、仮設敵となり、攻撃隊となつた他区隊が攻めてくる時に、威勢よく見せるために、弾着を模擬的に表す石灰を空に放りあげるだけだったから楽な仕事であつた。

今でも私は思う。あんな子供だましのような演習をして、本当に日本は戦争に勝つ積もりであつたのかと。最後に分列行進が行われることになつてゐた。分列行進に間に合うようにと、二キロメートルくらい東方に出されていた二人の斥候が、息を切らして私達の隊列の方に来つて来た。分列行進はまさに始まらんとしていた。一区隊長が斥候に向かって叫んだ。「こ

らあつ、その学生隠れろ」斥候は知らずに、どんどん走ってくる。「馬鹿あ、消えてなくなれ、まだ分からんかあ」やつと異様な罵言に気づいたのか、剣付き鉄砲をキラキラさせて走ってきた二人は草藪の中に隠れた。

分列行進はその直後、異常無く行われた。第一区隊の取り締まり学生の「総員五〇〇名」の申告と共に。本当は二人足りないのです、四九八人であり、そのことは演習統裁官？の軍医中將も耳が聞こえたなら知っていたはずなのである。これが軍隊なのだと私は分列行進の列中にいながら、改めて感じ入った。

私達は臨東三の教育終了と同時に大学も卒業し、卒業証書は解剖学のT教授がわざわざ長崎から持ってきてくれた。それを渡して貰う時、私達の先輩の第一区隊長の計らいで広場の一画が与えられた。そこでT教授を囲んで長崎医大組が坐っていると、某大学出身らしい臨東三の軍医大尉がやって来て、私達に別の場所に移動しろと言うのである。要するに、居候のような私達採用予定者に好きなようにさせてたまるかというわけであり、そのようなことを私達を移動させたあと、彼の卒業した大学の者に話していた。今でもにがにがしく思い出されることの一つである。

陸軍と海軍の仲が悪いことは、昭和十九年の三月に佐世保の海軍病院に実習に行つて知った。

海軍には海軍体操という素晴らしい体操があり、それは心電図を取ったりして、研究したものであった。陸軍がその研究結果を教えてくださいと言った時、私達を指導していた海軍の軍医大佐（ダイサと海軍では言う）は、敢えて貸さなかったそうだ。彼の話では厚生大臣の小泉親彦陸軍軍医中將に所要があり面会に行った時、長く待たされたからだと言う。「江戸の敵を長崎で打つ」というが、戦争で勝つか負けるかという時に、面会で待たされたから心電図等を貸さないというのでは子供の喧嘩と変わらない。その軍医大佐の話ではガダルカナルも陸軍の失敗のようなことを言っていた。

しかし、最近本を読んでいたら海軍は「天が落ちてくるようなことがあっても、ガダルカナル島がアメリカの手に渡るようなことはない」と陸軍に対して大見栄をきって陸軍の上層部を動かしたらしい。このことをあの海軍軍医大佐が聞いたら、どう思うだろうか？ この間も、ある会合で話をしていたら、陸海軍の話になり、元海軍軍医中尉の医者から、「何を言うか、この陸助めが」と私は言われ、あ然とした。陸海軍のいがみ合いが、戦後四〇年以上経っても続いているのには度肝をぬかされたのである。

これは陸と海との出来事であるが、同じ陸軍の中のしかも軍医同士でありながら、自分の大学のために私達を他の場所に追いやって、しかもそれを自慢する、こういう手合がいるのに、私は悲しくなった。せめて私だけはそんなことはすまいと心底から思った。